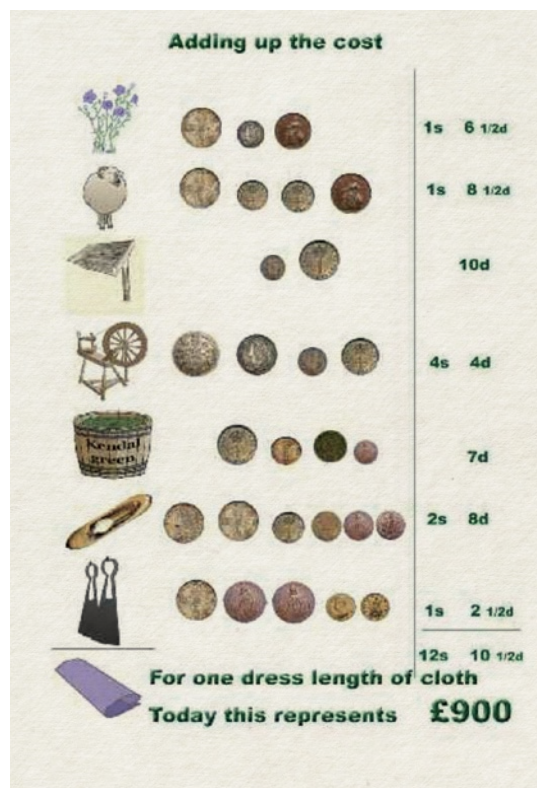




一枚の生地の価格に加算されているもの



麻原料代	1 s	6 ½ d
羊毛 原料代	1 s	8 ½ d
カード加工賃		10 d
糸紡ぎ代	4 s	4 d
染色代		7 d
織賃	2 s	8 d
仕上げ代	1 s	2 ½ d
		12s 10 ½d

1着のドレスをつくるのに必要な生地代を、現代の価格に換算すると£900になります。

※過去5年(2018~2022年)の英国ポンドのレートは日本円で140~150円です。それから計算すると、£900は、126,000~135,000円になります。

18世紀の英国の毛織物産業は、1733年John Kayの飛び杼の発明、1764年のJames Hargreavesのジェニー紡績機の発明が続き、問屋制家内工業から、大量生産に移行しつつあり、毛織物産業も、そのシステムが大きく変化する時代でした。(本出)



ケンダルでは布はどのような用途に使われたのか

男性はテーラーで仕立てました。一方女性はテーラーで仕立てるか、お針子になってより上等な服を縫う側になることもありました。たいいてい自分の服は自分で縫っていました。

テーラーでは婦人物のコートやマントを仕立てることもありました。既製服は、地方ではあまり見られませんでした。しかし英国南部では、1680年代くらいにようやく手に入れることができたようです。

クロークはだいたい10~20シリング、シャツは1.15~2ポンド。当時織り手(織り職人)の平均給与は1週間で1ポンド以下でした。女性だと1週間でたったの5シリングでした。



長島伸『世紀末までの大英帝国』法政大学出版局より引用

【英国の貨幣の単位】
1年=約52週 £ (ポンド)、s (シリング)、d (ペニー、ペンス)、£1 = 20s、1s = 12d



一枚の生地が出来るまでにかかるコスト

このケンダルのパターンブックは、産業革命直前の織物産業のスナップ写真を私たちに見せてくれます。そして1反の生地が仕上がるまでには多くの工程を要し、それぞれがどれほど多くの時間と労力が費やされているかを見てきました。しかしその賃金はわずかなものにもかかわらず、集約的労働であったため、織物は非常に高価なものにならざるをえなかったのです。

もし彼らが年に1着か2着の服の分の布しか織れなければその分の賃金しかもらえないこととなります。よって少しは新しい生地を買えたかもしれませんが、たいいていは古着だったでしょう。

家政婦をしている独身の女の子を例に見てみましょう。18世紀中期、彼女の賃金は1年で2ポンド15シリングでした。1年契約で、1年勤めてようやくお給料が払われました。彼女は雇い主の家に住み込んでいましたから、家賃と食費はかかっていません。しかし彼女は自分の給与で1年に使う服と靴は買わなくてはなりません。まず12~13シリングで着る物を買います。ペチコートだけで5~6シリング、1年の給与の1/3になります。さらにシュミーズとエプロンとハンカチーフと靴とストッキングを手に入れなくてはなりません。もし彼女がお裁縫ができなければ、その分もテーラーに頼まなくてはなりません。そしてこれから先1年の必要経費も賄わなくてはならないのです。

パターンブックにある紳士物の生地は、豪華なウェストコート用の素晴らしいセレクションも見られます。色もディテールも素晴らしい薄手の生地、ステイタスを表しているものでした。また麻-ウールのウェストコート用の生地は労働者にも普通に着られていて、多分男性用の生地としてふさわしいものだったと思われる。最も高価な生地、ウェストコートの前見頃分の2ヤードだけで、4~5シリングかかった生地もありました。後ろ見頃は、脱いで何かするわけではなかったので、麻の無地かストライプのものが使われ

ました。労働者の平均賃金は1日1シリングですからウェストコート1着は3週間分の賃金に相当しました。

1971年2月15日に十進法での通貨の切り上げが施行されるまでは、18世紀の通貨は、12ペンスが1シリング、そして20シリングが1ポンドでした。

そして明記しておきますが、次のページにある硬貨はすべて、オフィシャルのものではありませんでした。18世紀の間、労働者に支払う銅の硬貨はほとんど流通していませんでした。多くの商人は特定の地域だけで通用する硬貨を使っていました。この行為はどの地域でもされていましたが、18世紀の終わりに地域通貨を規制する法律ができました。

さて21世紀の現在は、わずか3ポンドか4ポンドでTシャツを買い、1回着ただけでタンスの中にしまいこんだり、婦人服の市場では衣服はゴミのような扱いを受けたりしています。しかし商業が活発になる前は衣服は貴重なものでした。すべての衣服は時間と労力を要するので、一旦手に入れたら繕ったり、何かにつくり直したり、次の世代に手渡されたものだったのです。



This is a book of 498 textile samples each with a stock number. The samples are of linsey-woolsey cloth which has a linen warp and a woollen or worsted weft. One or two samples also have a very little additional cotton or silk. It seems likely that all the textiles were manufactured in or about Kendal. In national terms this may be a unique relic of the time. It has been suggested that this was a chapman's pattern book, i.e. one that was taken out by travelling chapmen or pedlars to gain orders. However, these people were 'mercers for the poor'. They carried goods of all sorts for immediate sale, usually on just one horse. It is much more likely that the book was a stock book indexed to individual weavers. It may have been taken to big fairs or other merchants and used in the wholesale trade, not retail.